

公表

事業所における自己評価総括表 (放課後等ディサービス)

○事業所名	児童発達支援センターにこっと		
○保護者評価実施期間	令和8年1月16日		令和8年2月5日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	23家庭	(回答者数) 22家庭
○従業者評価実施期間	令和8年1月26日		令和8年2月5日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6人	(回答者数) 6人
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年2月10日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	個性を共感的に理解し、児童の成長の足跡を確かに見取るとともに、専門的な立場からの個に応じた課題解決の方策を明らかにして個別支援にあたっている。	児童発達管理責任者はじめ言語聴覚療法士(ST)、作業療法士(OT)、保育士、看護師等が、専門的な立場から児童一人一人の育ちをとらえて連携して日々のチーム支援にあたることにより、課題を解決したり確かな成長につなげたりしている。	専門性の高い職員が、それぞれに更なる高みを目指して研鑽に励んでいる。児童とともに成長できる職員集団であるために、より一層研修等に参加し資質の向上を図る。
2	放課後等ディサービスを利用している児童の多くは、訪問支援事業を併用しており、両部門の担当者が情報を共有して支援にあたることができる。	通所する児童の記録は職員間で共有され、ケースカンファレンスで支援の方向性や具体的な支援策が熟議されるため、チームでのサポート体制が充実している。	児童本人は勿論のこと保護者の思いや願いを最大限に汲み取った支援計画づくりに注力する。そのためには、保護者との個別面談が重要であり、支援計画の説明や適切なアセスメントを踏まえた支援計画づくりに努力する。
3	児童発達支援センターにこっと周辺の豊かな自然環境、地域施設を十分に活用して、地域にひらかれ、地域に愛される事業所となっている。	事業所周辺の野原に出かけて虫を捕まえたり、小川で魚をすくったり、コミュニティセンターの公園に散歩に出かけたりと、所外活動を積極的に仕組み、心身ともに明るく元気な児童を育てている。	今年度は、全国的に熊の出没やそれに関わる被害が多く、児童の命を守るという観点から秋以降の散歩等の活動を制限せざるを得なかった。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	各種学校が長期休業に入ると、放課後等ディサービスを利用する児童が増加し、対応する職員が不足傾向となる。	長期休業中の利用児童の増加を見越して、期間を限定して臨時職員を確保するよう努力しているが、安定した確保には至っていない。	児童と職員の良好な信頼関係を構築していくことが日頃から大切であるが、児童と職員の固定的な関係づくりとならないよう、多くの職員が安定して複数の児童と関わり合える関係づくりに努めることが重要と考える。このことを前提に、長期休業中の職員不足に対応していく。
2	活動状況を定期的に発信する手立てとし毎日の連絡帳やライン連絡が主な手段となっている。より具体的な学びの様子を保護者にお伝えしていく上で、ホームページやSNSでの情報発信が求められている。	通所児童の増加に伴って事務的な業務量も増加し、お便りの発信やホームページでの情報発信がどうしても後手に回ってしまう傾向にある。	業務支援支援ソフト「ハグ」を4月より導入する。本ソフトを活用することで、保護者支援、保護者連携に係る情報発信ツールや文書のやり取りツールも効果的活用につなげていく。交通安全を含めて、所外活動時の命の安全確保に万全を期していく。
3			